白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

小学生３・４年　作文の部　優秀賞

「たくさんの本が私に教えてくれたこと」

北陸学院小学校三年　平井（ひらい）　遥（はるか）

私は夏休みにたくさん本を読みました。時間があるときは、一日二十さつ、夏休み中に合わせて二〇八さつ読みました。

一番いんしょうにのこったのは、知里幸恵とアイヌみんぞくについての本です。

そのほんのなかで、むかし、アイヌみんぞくの人たちは日本人にさべつされ、今もさべつをされることがあると知りました。

私は、なぜ同じ人間なのに、さべつされるのだろうとふしぎに思いました。

「さべつ」という言葉は、アメリカのリンカーン大とうりょうの本を読んだときに、はじめて知りました。その時は、さべつという言葉の意味がわからなかったけれど、何回も読んでいるうちに、かなしい気持ちで心がいっぱいになりました。

とくに黒人の親子が引きはなされて、ねだんをきめられて、売られていたところを読んだときに、人間はものではないのに、なぜそんなことをするのか分からず、読んでいてつらい気持ちになりました。

そのような人しん売買があった時代は、黒人のみなさんはまい日こわかっただろうし、いつか自分も…と、おびえてくらしていたと思います。

私は平和な日本でふつうにくらしているけれど、さべつをされていた人たちは、あんぜんな家に住めるわけでもないし、ごはんもおなかいっぱい食べれるわけでもないし、ふつうに学校に行って勉強ができるわたしの生活は、あたり前ではないと思いました。

そして、さべつの問題についてもっと知るために、図書館でストップ止めたいさべつという本をかりました。さべつすることは、ぜったいにしてはいけないことです。さべつされた人はかなしく、いやな気持ちになることを、夏休みの自由けんきゅうで発表をして、クラスのみんなに、知ってほしいと思いました。

世界には、さべつをなくそうとした人がたくさんいます。そのなかで、わたしのいんしょうにのこっているのは、マザー・テレサです。びょうきになって道でたおれていたまずしい人のかんびょうをしているとき、外国人であるマザー・テレサのことをさべつする人たちから、ここから出て行けと言われたけれど、かんびょうをやめませんでした。もし、わたしがその場にいたら、こわくてにげていたと思います。

マザー・テレサは「もしも月の世界にまずしい人びとがいるなら、私たちは月へも行きます。」という言葉をのこしました。

さべつをうけて、びょうきでくるしんでいるまずしい人や、親をなくした子どもたちをなによりも大切にしたマザー・テレサにとても感動しました。

わたしは今まで、家がなく、まずしい人を見たことがありません。さべつをする人、される人も見たことがありません。

たくさんの本を読み、世界には文字の読み書きができない人や、学校にも行けずに一日中はたらいている子どもが、今もたくさんいることを知りました。

さべつをなくすために私たちができることは、見た目のちがいや、さべつにつながる言葉を言わない、いろいろなさべつについて知ること、ちがう考えの人いても「あなたはそう思ったのだね」と、うけいれることが大切だと思います。

わたしのお父さんは「こまったことがあったら、本を読んでみるといいよ。きっと答えが見つかるよ。」と言い、お母さんは「本を読むことで、知らない世界を知ることができるね。」と言っていました。

わたしは、白山市にひっこしてきた四さいのころから今まで三千五百さつの本を図書館からかりて読みました。本を読んでいるときは、わたしにとって大切な時間です。

今までに読んだ本が私に教えてくれたことは、たくさんあります。日本と世界のこと、くるしんでいる人がいること、それをたすけよう

とがんばっている人たちのことを知ることができました。
　これからもたくさんの本を読んで、いろいろなことを学び、大きくなったら、世界でおきている問題をかいけつできる人になりたいです。

